

身命を賭して難民を救済

「高島 玄俊」

石田 敏

高島玄俊は、文政元年（一八一八）八月、近江国高島郡朽木庄宮前村（現、高島市朽木宮前坊）で師村甚七の次男として誕生し、当時の慣

わしで、十四歳になると近隣の寺へ小僧に出されています。

江戸時代には前後三十五回に及ぶ飢饉が記録されていますが、なかでも玄俊が寺へ入った翌年、すなわち天保四年から同七年にかけて発生した「天保の大飢饉」は悲惨なものでした。『朽木の昔話と伝説』によると、「村中は、どこにも食うものがなかった。山野草も取りつくし、しまいに松の皮も食う有様だった。それも無い者は稲木を削って食べた、何でも食いあさった」と書かれており、別の史料には多数の餓死者が出たことが記録されています。

生来学問好きであった玄俊は、この惨状を目のあたりにしたことを契

シリーズ③ 「郷土高島の先人に学ぶ」

機として、医者になるために朽木を後にしたようです。十六歳で丸亀藩医河田玄叔のもとで漢方医を、京都の村田順道のもとでは古医方を、さらに山本永吉について儒医学を学んだといわれています。

弘化元年（一八四四）、二十六歳になっていた玄俊は、さらに西洋の医学を学ぶために長崎へ向かいましたが、途中乗っていた船が伊予灘付近で難破したらしく、豊後国の府内（現、大分市）に漂着しました。その後三年間、玄俊の身上について知り得る資料が不足しているために理由は不明ですが、府内に留まる決心をして町医を開業しています。またこの頃妻を娶り、ほどなく長男が誕生しています。



高島玄俊の生家跡に建つ顕彰碑

嘉永四年（一八五二）の秋、十三歳になった玄俊は、妻子を連れて朽木へ帰省しましたが、故郷朽木の地を踏むのはこれが最後となりました。

府内での玄俊は、医療活動に大変熱心だったうえに、貧しい人からは治療代をとらないばかりか、金を与えることもたびたびであったために、多くの人々からは慕われましたが、家計は常に火の車であったといわれています。そして、開業から十年目には、玄俊の活躍ぶりが府内藩主の耳にも達し、藩の医事監督に任命されています。

なお、今日まで、玄俊が大分で高く評価されているのは、医者としての活躍のみではありません。貧民の生活を安定させるために、医業の収入や藩からの給米を資材の調達に当て、新田の開発を行っています。

慶応二年（一八六六）に発生した飢饉の際には、病軀をおして立ち上がり、仲間とともに義援金を募って、一万人の人々に救いの手を差し伸べました。また、明治二年（一八六九）に百余戸を消失した市内の大火では、私財を投じて救援活動を行い、さらに、明治七年には大分県第一小学校の建設にも尽力しています。

しかし、永年の無理がたたったために、玄俊の病状は二度と回復する

ことがなく、明治十二年（一八七九）五月に六十一歳の生涯を閉じました。

玄俊死去の訃報が伝わると、その死を心から惜しむ市民三千人が、葬儀の列を作りました。また、玄俊の没後、生活に困窮した高島家へは、毎年暮れになると玄俊に救われた人々から飯米が届けられたということです。

では、玄俊が身命を賭して行った難民救済の原動力は、どこから生じたものでしょうか。天性として備わった道徳性やヒューマニズムとして片付けられるものではないように思われます。おそらく、少年の日に郷里で目にした天保飢饉の惨状が、その後の玄俊の人格形成や思想のうえに大きな影を落とさなければおかかったのではないのでしょうか。

